

メランヒトン邦訳ノート (3)

菱刈 晃夫

魂についての書 (1553 年)

Liber de anima

すでに 1540 年『魂についての覚書』(*Commentarius de anima*)としてアリストテレスの *De anima* のコメントをメランヒトンはあらわしていたが、これは 1553 年に『魂についての書』と改題され、18 世紀に至るまでドイツの大学における哲学の教科書として用いられた。メランヒトンの人間学ともいいうる内容が整理された形でおさめられている。詳細については、拙著『近代教育思想の源流—スピリチュアリティと教育』(成文堂、2005 年) 185-200 頁を参照されたい。

確実性の判定規範・基準について、メランヒトンはまず三つのものをあげているが、四つ目として神の啓示をあげている点は、やはりルター学徒であることを示している。一般経験は、みなに共通する通常の体験知と等しい。根本原理では、神の像 (*imago Dei*) としての人間と、その人間に内在する精神への信頼が寄せられる。順序理解は、論理的な思考を指す。これらは自然の光として人間にもとよりそなわる理性によって展開されるが、さらに重要なのは、聖霊によって点火された信仰の光である。メランヒトンは理性を否定することなく、理性がもつ積極的な能力と役割を認めたとうえで、信仰のもつ意義を強調してやまない。ここにフマニタスを回復、補完あるいは完成する機能としての^{スピリチュアリティ}霊性が示される。感性、理性、霊性の調和のとれた働きをメランヒトンは重視している。こうした見方は、いうまでもなく彼の教育思想のベースにもなっている。

テキスト(ラテン語)としては、邦訳ノート(1)(2)と同様 MSA 第3巻 340-342 頁を用いた。全 65 頁からの部分訳である。次も参照した。Schmidt, G.R.(hrsg.) *Philipp Melancthon. Glaube und Bildung*. Stuttgart 1989. ss.28-33.

* * *

ところで弁証論には確実さの規範ノルマについていろいろと示されている。それをギリシア人は真偽の標識クリテリアと呼んだ。ここではごく簡単に、さらにどのように考察するか、知性にそなわる自然の光とはどのような種類のものか、判断の基準とは何か、承認の確かさはどこからくるのか、といったことへと若い人々を促していきたい。

要するに確実さの規範には哲学によると三つある。一般経験、基礎知識、そして三段論法における順序理解である。

エクスペリエンティア・ウニベルサルリス

一般経験とは、感覚によって知覚されるものについて、健康な者はみな同じように判断するということである。つまり火は熱いとか、女は子どもを産むといったように。生き物の生命には、感覚と動作がある。死は生き物を滅ぼす。事実、一般経験はそうした知識が確かなことを示す。なぜなら、もし行動において反対のことを経験しようと意志するなら、自然と滅びに至るから。あたかも火は燃やすことを否定する者がいて、手を火のなかに入れば、確かに手は破壊されるのを感じるようなものである。したがって自然はこのようにつくられていることを認めなければならない。つまり神の作品とはそうしたものなのである。だれもさらに詳細な事例をさがす必要はない。すなわち一般経験に対立することは、神自身を攻撃することであり、このように神によって定められた秩序を否定することであり、まるで女が子どもを産むことを否定して、生きた人間を彫刻してつくりだそうと努力するようなものである。

プリンキピア

根本原理とはわたしたちとともに生まれつきのもので、神によりわたしたちに埋め込まれた、個々の学問の種子セミナである。結果、そこから人生で用いるのに必要な技術が引きだされる。数、秩序、割合、多くの命題の概念がこれら種子である。何か存在するものは、あるかないかのどちらかである。全体はどんな方法によっても部分より大である。神は永遠の精神メンヌであり、知恵あり、賢く、正しく、汚れなく、慈悲深い。この世界をつくり、ものごとの秩序を保ち、それに対する違反を罰する。人間の精神はこれに似せてつくられた。よって人間は賢く、正しく、慈悲深く、汚れなくあるべきである。これらの規範に従うとは、正しく行動することである。この規範に背くとは、神に不快で恥じるべきことをすることである。背く者は自らに罰をもたらすことになる。弁証論には根本原理に関する多くのことが述べられている

る。

三つ目の標識は三段論法における ^{インテレクトゥス・オルディニス} 順序理解であり、正しく部分を組み合わせることであり、弁証論に詳しく述べられている。ストア派の教説ではこれら三つのクリテリアは、アイステーシス、プロレープシス、グノーシスと名づけられている。経験を理解するのに疑いがない場合、アイステーシスと呼ぶ。根本原理をプロレープシスと呼ぶ。したがってグノーシスは判断であり、それは順序、あるいは結論、あるいは関連の理解である。

教会には四つ目の確かさの規範がある。すなわち、神の ^{パテフアクティオ} 啓示であり、これは明らかで間違いのない証拠によって示される。それは、預言と使徒の書のなかになお存在する。ところで、たとえ人間の精神が自然の光によって認識されたものと容易かつ堅固に賛同するとしても、同様の首尾一貫性でもってすべての理性的な被造物は神によって明らかにされた見解に賛同しなければならない。たとえ自然の光には真実であるとも確実であるとも見えないにせよ。2×4=8と疑いなく断言するのと同様に、神は人間を死から生き返らせ、教会を永遠の栄光によって飾り、罪人を永遠の罰に投ずる、とわたしたちは主張しなければならない。しかし多くのもっとも無謀な者たちは、快樂主義者やその他の者のように、神の告げ知らせに反対する。が、一部の人間は賛同し、不思議な証拠によって動かされる。このなかで福音の声を通して聖霊はこの光に点火する。そして精神を賛同する方向へと向ける。すると精神は聖霊に従う。福音の声をよろこんで迎え入れ、疑いに抵抗する。神によって明らかにされた言葉をよろこんで受け入れる、この賛同を ^{フィデース} 信仰という。これはある者たちにおいては強固であるが、ある者たちにおいては柔弱である。信仰を神からの取るに足らない恵みであるとわたしたちはいいたくない。それは神の秘密の場所から示されたのであり、自らをわたしたちに明らかにされたのだ。この啓示によって神がまさに人間に関心をもっていることが証明されたのである。よってこの啓示が人生の第一の光であってほしいし、すべての行動と計画を導いてほしい。信仰が点火されるために、毎日わたしたちは神に呼びかけ、啓示の証拠に思いをめぐらせたい。神の恵みによる善きものごとを認識し賛美したいものである。